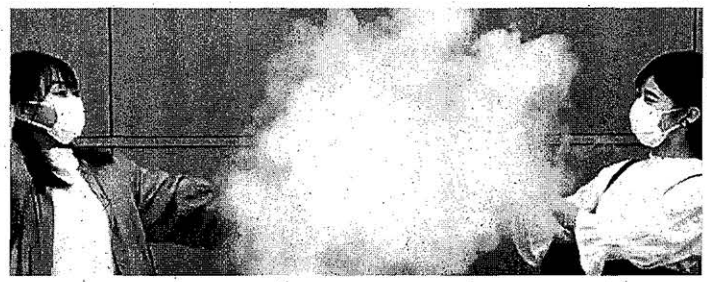
「コロナ手引」に介護施設悲鳴

国「エアロゾル」対策盛らず ―― クラスター多発

新型コロナウイルス感染症をめぐり、高齢者介護施設ではクラスター（感染者集団）の発生が最近の1週間だけで84件、累計5193件と多発している。国のエアロゾル感染に対する周知が不十分である可能性があるためだ。現場からは「科学的知見に基づいた効果的な感染対策を教えてほしい」と悲鳴が上がる。



エアロゾルに見立てた煙でエアロゾル感染の状況を再現した実験＝愛知県立大提供

エアロゾルは、空中を漂う微粒子のことを指す。世界保健機関（WHO）などによると、新型コロナウイルスは主に感染者から吐き出されたウイルスを含むエアロゾルを吸い込むことで感染する。換気の悪い場所などでは2㍍以上離れていてもエアロゾルが浮遊し、他の人に感染させる可能性があるという。

一方、国内では長らく飛沫（ひまつ）と接触によって主に感染するとされてきた。接触感染はまれで、飛沫は比較的サイズが大きいので感染者の近くにすぐに落下し、2㍍以上は広がらないとされる。厚生労働省がエアロゾルによる感染を認めたのは昨年10月に入ってからだった。

エアロゾルによる感染を防ぐには徹底した換気が求められるが、国内では相変わらず飛沫・接触感染対策に重きが置かれている。高齢者介護施設もその例外ではない。厚労省が介護施設向けに作成した感染対策の手引（第2版）では、新型コロナの感染経路は「飛沫」や「接触」とする一方、「エアロゾル」は認めず、手洗いや消毒の重要性を強調。サージカルマスクやゴーグルなどの着用を勧めている。

感染対策の手引にエアロゾル対策が反映されていないのはなぜなのか。厚労省老人保健課の担当者に聞くと「新型コロナの感染がエアロゾルによってなのか、まだエビデンス（科学的根拠）はきちんと確立していない」と説明。手引はあくまで参考情報として出しているだけで、近く改訂する予定もないという。

こうした厚労省の態度に対し、エアロゾル感染を防ぐため保育園や大学などで効果的な換気対策について指導してきた愛知県立大の清水宣明教授（感染制御学）は怒りを隠さない。「国が出している手引だからこそ国民は信じるし、それに基づいて現場は対策を講じる。国が言っていないことを事業所が独断で変えるのはほぼ不可能だ。誤った対策を広めておきながら『手引はあくまで参考』と逃げて、感染拡大の責任を事業所や国民に押しつけている。途中からでも国がエアロゾルで感染するとはっきり説明していれば防ぎようがあったし、多くの命を救えたはずだ」と訴えた。

国の手引通り対策を講じていながらクラスターの発生に見舞われている介護現場からは悲鳴が上がっている。これまで感染者の出た8施設に延べ70人以上を応援に出した「清山会医療福祉グループ」（仙台市泉区）代表で、精神科医の山崎英樹さんは派遣先の施設の状況に衝撃を受けたという。

レッドゾーンで休憩

宮城県では、2020年10月から感染者の発生した施設に別の施設から職員を派遣する応援制度が始まった。ある応援先の施設では、長袖のガウンやフェースシールドを着用しながら職員が手指や廊下などの消毒に汗だくになっていた。一方で、顔の表面との間に隙間（すきま）ができるサージカルマスクを着けて、感染者や濃厚接触者のいる感染リスクの高い「レッドゾーン」で業務に当たっていた。中には二酸化炭素濃度が2000～3000㏙（㏙は100万分の1）を超えているところもあった。1000㏙以上は空気の流れが悪く、感染リスクが高まると言われている。職員たちは、そんなレッドゾーン内でマスクを交換したり、マスクを外して休憩したりしていた。クラスターが発生した後も、換気の悪い浴室で入浴介助を続けたり、寒さのために窓を閉め切って入所者の歯磨きをしたりしている施設もあった。

高齢者はのみ込む力が弱いため、せき込むことが多い。職員は密着した介助が必要で、高齢者介護施設ではエアロゾル感染のリスクが高い＝清山会提供

山崎医師は「新型コロナはエアロゾル感染だと言われて久しい。換気など有効なエアロゾル対策を取ればクラスターは防げるのに、現場では相変わらず飛沫・接触感染を防ごうと過剰な消毒に時間と人が割かれている。クラスターの発生と誤った感染対策は大きく関係している」と指摘する。

高齢者介護施設は入所者が密集している上に、密着した介助行為が必要となる。要介護の高齢者はのみ込む力が弱いため、せき込んだり、難聴や認知症の影響でマスクを拒んで大きな声を出したりすることがあり、エアロゾル感染のリスクが高い。厚労省によると、全国の高齢者介護施設でのクラスターは医療機関や飲食店、企業などよりも多く、3月28日までの1週間で84件増え、累計で5193件に上る。

「サージカル」に警鐘

国立感染症研究所は28日、新型コロナは主にエアロゾル感染などによって起きると発表した。国立病院機構仙台医療センターの西村秀一ウイルスセンター長はクラスターの発生について「新型コロナは主に飛沫と接触によって起きるという誤った説が幅をきかせたせいだ」と主張する。手元の消毒に対策の力点が置かれ、エアロゾル感染を防ぐ上で最も重要な対策の一つである徹底した換気が重視されてこなかったため、高齢者介護施設でのクラスターにつながっているという。さらに、感染防止にとって重要なマスクの着け方一つをとってもおろそかになっているといい「サージカルマスクは隙間だらけで、ウイルスを含んだエアロゾルの格好の餌食だ」と批判する。

一方、宮城県内で認知症高齢者の介護施設など約50カ所を展開する清山会では、エアロゾル感染を防ぐため専門家の指導の下、普段から換気を徹底し発生時には顔との密着性が高い医療用のN95マスクを着用してきた。これまでに計15人が感染したが、5人以上のクラスターの発生には至っていない。

3月4日には、宮城県内の老人福祉施設協議会ら6団体らがクラスターを防ぐため、最新の知見に基づいた対策や指針を求めた。

【林奈緒美】